

渥美窯の展開

田原市立田原中学校 教諭 安井 俊則

おはようございます。ただいまご紹介いただきました、安井俊則です。よろしくお願いたします。本日は、『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世常滑系』に関連して、「渥美窯」についての話をいたします。

さて、今回発行された『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世常滑系』ですが、タイトルは「常滑系」となっています。これは、常滑窯ばかりでなく、渥美窯や足助窯・幸田窯など愛知県内に所在する中世の常滑系諸窯をまとめたものです。編集にあたっての一つのコンセプトとして、掲載する遺物実測図については、渥美窯の製品も常滑窯の製品もその他の窯跡の製品も、報告書類に記載されているものは取り直し、実測図が公表されていないものは新しく実測をすることにしました。それは、渥美窯・常滑窯にかかわらず、すべての窯跡の遺物について、共通の認識をもって新しく表現し直したかったからです。本日会場にお越しの常滑窯を担当した瀬戸市埋蔵文化財センターの青木修さんと一緒に、北は岩手県から南は広島県に至る各地の消費地遺跡出土の製品や県内の生産地出土の製品を実測して回りました。ただ、実に多くの方々のところでお世話になって実測図を取らせていただいたのですが、『愛知県史』を編集する段階では、そのすべてを掲載することができませんでした。それで、未発表の資料もいつか発表できる機会をつくりたいということをお話と話を青木さんとはいつも話しています。いつか何らかの形でそれらの実測図を発表する機会を持ちたいと思っています。

さて、福岡先生のお話にありましたように、渥美窯についての総合的な発表は初めてということですので、前置きはこれぐらいにいたしまして、基本的な事柄も含めて、一から順を追って「渥美窯」について説明させていただきます。

1. 範囲

「渥美窯の展開」ということですが、まず「渥美窯の範囲はどこからどこまでか」という問題があります。これについては、ほぼ渥美半島全域が分布範囲に相当します。現在の行政区分でいいますと、渥美半島基部の豊橋市南西部と田原市全域がこれに相当します。

「渥美窯の窯跡群分布図」(図1)に見られるように、窯跡は6つの地区(A:柳生川地区、B:梅田川西地区、C:汐川南地区、D:汐川北地区、E:芦ヶ池南地区、F:伊良湖地区)に集中しています。

2. 立地

立地については、常滑窯と少し異なります。渥美半島は、太平洋岸から三河湾側にかけて洪積台地が形成されており、そこに窯が築かれる場合がほとんどです。半島の西よりにあるE地区の一部と、西の端にあるF地区だけは台地ではなく、山の斜面を利用して窯が築かれています。A～E地区に所在するほとんどの窯は、洪積台地に開析された谷の斜面を利用して築かれています。

『愛知県史』をまとめる段階では、約176の窯跡が確認されていましたが、それから半年も経たないうちに、続々と新しい窯跡が発見されています。現在、愛知県に登録されている窯跡は185ありますが、これからも増加が見込まれます。今、渥美半島の太平洋岸では豊川用水路の第二次工事が始まっていますが、その関係で、これまでの分布調査ではつかめなかった窯跡がどんどん発見されています。地表から5mほどの深さのところで見つかる窯が多く、分布調査ではわかりにくかったものです。前回の昭和30年代の豊川用水路の第一次工事の際に、その拌土のかなりの部分を、窯が築かれた谷に埋めたのではないかと推測されます。その当時に分布調査をしっかりと

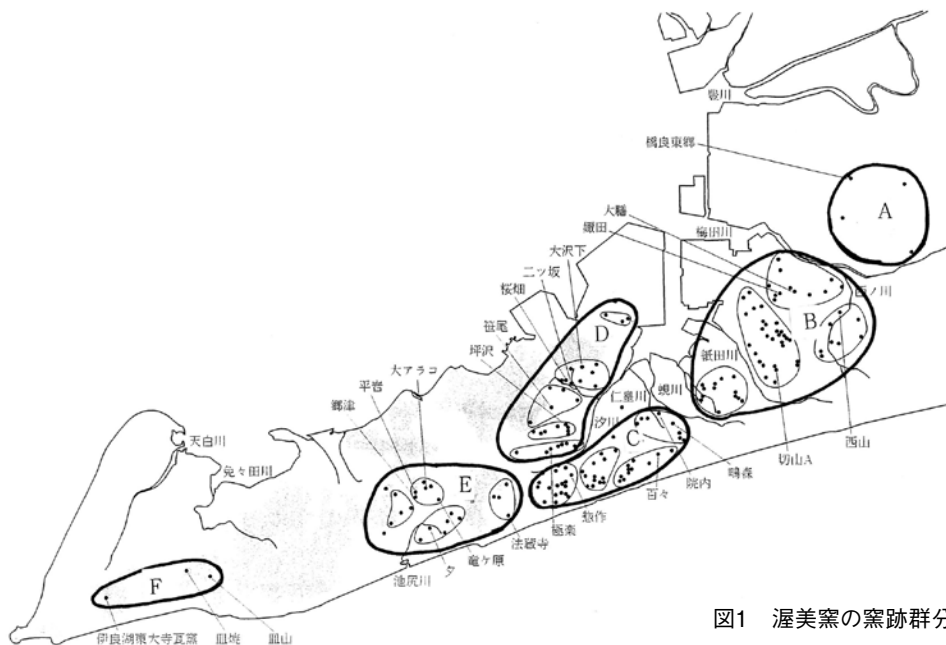


図1 渥美窯の窯跡群分布図

行っていれば、もう少し確かな実態がつかめていたと思います。

とにかく、現在も新しく発見される窯跡は増えており、消滅した窯も考慮に入れると、600基以上の窯が構築されたと推測されます。

3. 分布

渥美窯の分布については、前述のように、概ね6つの地区に分けられます(図1)。これら6つの地区は、渥美半島内を南から北にかけて流れる中小河川を境としています。地区と地区の間には空白域が存在するとともに、各地区はいくつかの支群によって構成されています。B地区からE地区にかけて17の支群が存在します。A・F地区は支群を形成しません。それぞれの地区・支群では微妙に特徴が異なるため、各地区・支群が同じような生産体制で操業していたとは考えられません。

A：柳生川地区は、渥美半島で一番大きな河川である梅田川の右岸にあたる地区で、橋良東郷窯が所在します。橋良東郷窯は豊橋市教育委員会が灰原部分だけ発掘調査をしています。輪花碗類や甕類のほか、かなりの量の瓦も出土しており、瓦陶兼業窯ではないかと考えられます。豊橋市の東隣の静岡県に中世湖西古窯址群(中世湖西窯)

がありますが、初期の窯には瓦陶兼業窯(山口第17地点1,2号窯など)があることが確かめられています。A地区は中世湖西窯に隣接しているため、他の地区よりも中世湖西窯との類似点が比較的多く見られます。

B：梅田川西地区は、梅田川と渥美半島の中央を流れる紙田川に挟まれた地区で、豊橋市に属します。キセキ窯や姫田窯からは蓮弁文壺が出土しています。後述しますが、渥美窯編年でいうと3期に属する、13世紀代に入ってから窯跡が非常に多いのが特徴です。3期になって生産体制を拡大する中世湖西窯に類似した特徴を持っています。渥美窯と中世湖西窯は窯の構造や使用する粘土、漬け掛け輪花碗の生産など多くの共通する特徴を持っているため、共通の基盤のもとに成立したと思われるのですが、それぞれ独立した生産体制をもって展開したことが明らかになってきています。渥美窯のA・B地区は、渥美窯の中でも比較的中世湖西窯と類似した特徴を持っていると言えます。

C：汐川南地区は、太平洋岸に沿って分布しており、この地区では前述の豊川用水路工事によって新しい窯跡がどんどん発見されています。この太平洋岸に展開する地区は、これまでの調査によ

ると、山茶碗・小皿類を中心に生産していたと考えられていましたが、壺・甕と山茶碗類を同時に焼成する窯が次々発見されており、その認識が改まりつつあります。図1の分布図にある黒点の一つの窯跡ですが、現在はC地区内の空白地帯が埋まってきており、太平洋岸に沿って帯状に連続して窯が存在したのではないかというような状況です。一方、同じC地区でも蜷川に沿って分布する蜷川支群では、壺・甕類を専門に生産する窯跡（鳴森窯・院内窯など）が中心になっていて、太平洋岸の支群とは別の様相を呈しています。神ノ釜窯からは瓦類が、鳴森窯からは袈裟襷文壺が、院内窯からは蓮弁文壺が出土しています。

D：汐川北地区は、現在の田原市街地に所在します。この地区には坪沢窯があり、蓮弁文壺の生産が確認されています。三重県伊勢市の朝熊山経塚出土品の銘文から経筒外容器の生産も推定されます。笹尾窯からは袈裟襷文壺が出土しています。この地区は、壺・甕等を主体に生産しつつも、かなりの量の山茶碗類も生産していました。

E：芦ヶ池南地区は、渥美窯が世に出るきっかけになった、国の史跡である大アラコ窯が所在する地区です。この地区は、特殊な製品（特別注文品）である全面灰釉壺類や藤原顕長銘の短頸壺に代表される器面に文字を刻んだ刻字壺、魚や鳥の絵を刻んだ刻文壺などが出土しています。灰釉陶器を模した製品の生産（夕窯・青木池窯）を含め、特別注文品を多く生産している地区です。他の地区が伊勢神宮の神戸・御蔭・御厨との関連が深いものに対して、E地区は、唯一国衙領であったと推定される地区です。

F：伊良湖地区は、国の史跡伊良湖東大寺瓦窯跡が所在する地区です。宗教に関連する製品が多量に生産されています。伊良湖東大寺瓦窯からは瓦経・経筒外容器が、皿焼窯からは陶製五輪塔や瓦塔・経筒外容器などが、皿山窯からは香炉が出土しています。渥美窯産の経筒外容器や瓦経等が消費地の経塚などから出土することが多いですが、そのほとんどはこの地区で生産されたものではないかと思われます。

このように、渥美窯は、基本的な製作技法や窯

構造などでは共通の基盤を持ちながらも、生産する製品の種類や生産体制などにおいては、それぞれの特徴を有する6つの大きな地区から成り立っています。

4. 窯の構造

では、実際の窯の構造はどのようなものか。図2は渥美窯・常滑窯の窯体構造模式図です。渥美窯・常滑窯の窯は、窖窯（あながま）と言われる種類に属するものです。窯の真ん中に、渥美窯や常滑窯に特徴的な「分炎柱」があります。それをばさんで、燃料を焚く「燃烧室」、反対側には製品を並べる「焼成室」があります。焼成室の先に、煙を出す「煙道部」があります。また、燃料の投げ込み口は「焚口」といいます。燃烧室の壁面や床面が赤褐色に焼けている例が多いことから、燃烧室には天井がなかったと推定されます。従って、これまでに流布している模式図とは異なり、この図には天井が描かれていません。渥美窯や常滑窯・中世湖西窯などは、基本的にはほとんど同じ窯構造をしています。なお、分炎柱の横には「間仕切り障壁」という燃料の流れ込みを防ぐための壁が描いてありますが、これは常滑窯によくみられる特徴で、渥美窯で間仕切り障壁が見られるのは、現在のところ1基知られているだけで、他にはほとんど見られません。ここに、渥美窯と常滑窯の窯構造のわずかな違いが見られます。

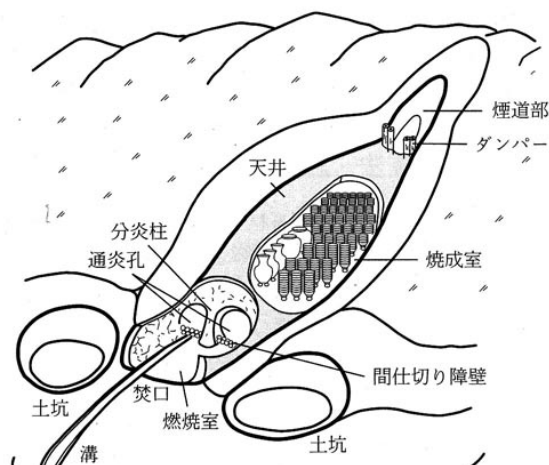


図2 渥美・常滑窯の窯体構造模式図

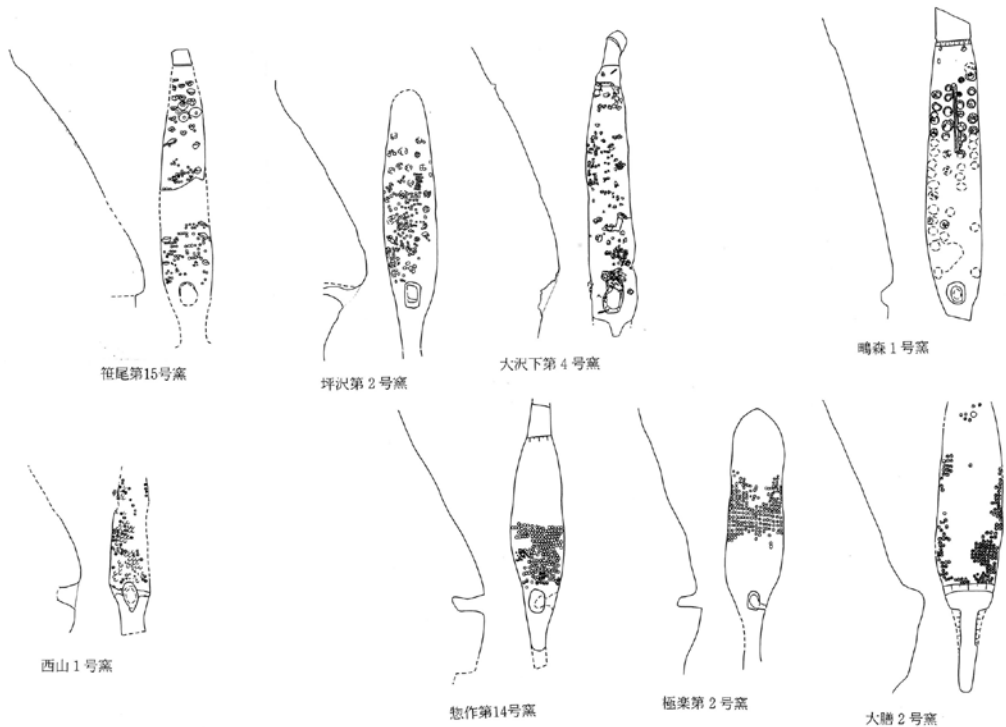


図3 渥美窯の窯体構造

5. 渥美窯の窯体構造

そこで、渥美窯の窯を上方から見た「渥美窯の窯体構造」(図3)をご覧ください。渥美窯の製品には、山茶碗・小皿類、壺・甕等があります。焼成される製品の種類により、山茶碗類を専門に焼成した窯(山茶碗専焼窯)、山茶碗を主体とし少量の壺・甕類を焼成した窯(山茶碗焼成窯)、壺・甕類を専門に焼成した窯(壺・甕焼成窯)、山茶碗類と壺・甕類を同時焼成した窯(壺・甕・山茶碗焼成窯)があり、それぞれに窯構造やその変遷に違いがみられます。

渥美窯成立当初は同一の窯で山茶碗類と壺・甕類を同時に焼成していました(壺・甕・山茶碗焼成窯)。笹尾第15号窯がその代表例です。壺・甕類もかなりの量を焼いているにもかかわらず、中央部の床面傾斜の急なあたりでは輪花碗と小碗を多数重ね焼きしています。スペース的には輪花碗類と壺・甕類が、ほぼ半々の割合で置かれています。渥美窯の古い時期(渥美窯編年1a期)に属する窯は、全長16mを越す大型の壺・甕・山茶碗焼成窯が大部分です。

次に、坪沢第2号窯(1a期)です。この窯は笹尾第15号窯に比べると少し新しい時期の窯ですが、渥美窯の特徴の一つである、分炎柱の焼成室側床面を大きく掘り窪めて、甕を据えるスペースを広く作り出しています。坪沢第2号窯は、焼成途中で天井が落下し壊れてしまったようで、窯詰めされた製品がほとんどそのままの状態に残っており、窯詰めの詳細がよくわかります。壁面直下に沿って大型の壺・甕類を並べ、中央部分では輪花碗類を並べていました(壺・甕・山茶碗焼成窯)。笹尾第15号窯の次の段階で初めて、分炎柱の直後を掘り窪めるといった渥美窯や中世湖西窯独特の特徴が出現します。

そして次の段階が、大沢下第4号窯です。これは渥美窯編年でいうと1b期に属する窯です。1b期になると、輪花碗類を主体に壺・甕類を少量生産する窯(山茶碗焼成窯)と、壺・甕類と輪花碗類を同時に焼成する窯(壺・甕・山茶碗焼成窯)の2種類の窯が、同一の窯跡でほぼ同時期に操業しているのが確認されています。大沢下第1・2号窯は前者、大沢下第3・4号窯は、後者の特

徴を持つものです。

残念ながら、2 a期の壺・甕・山茶碗焼成窯の実態はよくわかっていません。鳴森2・6号窯がこれにあたりますが、窯の残存状況が悪く、窯構造の全体像を提示することができません。

2 b期になると、壺・甕類を専門に焼成する大型の窯（壺・甕焼成窯）を構築するようになります。それが鳴森1号窯です。大きな壺・甕類を斜面に置く場合、2 a期までは径20cmほどの大きさの焼台を5つぐらい組み合わせ、その上に甕を据えていましたが、鳴森1号窯では、窯の床面自体を径40cm、深さ10cmほどの円形に掘り窪めて、その穴（製品固定ピット）の底に甕の破片を敷き、その上に甕を据えるようになります。焼成室の床面傾斜がかなり緩やかになっており、大量の壺・甕類が置けるようになっています。2 b期でもやや新しい時期に属する坪沢第1号窯では、製品固定ピットが約80か所検出されており、1回の焼成でおそらく80個体以上の大きな壺・甕類が生産されたのではないかと思います。現在のところ、製品固定ピットを有する壺・甕焼成窯は、C地区の蜷川支群（鳴森1・3・7号窯、院内第1号窯）とD地区の加治支群（坪沢第1・10号窯）で検出されていて、その分布範囲が限られています。

こうした流れがある一方で、山茶碗類を主体に焼成している窯（山茶碗焼成窯）もあります。それが西山第1号窯です。これは、B：梅田川西地区にあります。全長11m前後の非常に小規模な窯です。しかも床面傾斜がかなり急角度になっています。ほとんどの製品が輪花碗類ですが、分炎柱直下でごく少量小型の壺類を焼いています。常滑窯でも最も初期の窯は、山茶碗類を主体に焼成している非常に小さな規模のものだとされていますが、おそらく渥美窯でも一番古い時期の窯が発見されるとしたら、この西山第1号窯タイプの窯が出てくるのではないかと思います。また、前述した常滑窯によく見られる間仕切り障壁を持っている窯は、渥美窯ではこの西山第1号窯1基のみです。他の渥美窯にはみられない特徴を持つということで、非常に珍しいタイプの窯で

あることは確かです。

次の時期（2 a期）に属するのが、惣作第14号窯です。これは輪花碗・山茶碗と小皿だけを専門に焼いている山茶碗専焼窯です。2 a期から2 b期にかけて、渥美窯全域で山茶碗専焼窯が爆発的に増加します。このタイプの一番古い時期のものは1 a期からあります（平岩第1号窯）。1 b期の山茶碗専焼窯は、今のところ発見されていません。

次の3 a期になると、極楽第2号窯のように、焼成室の床面積がかなり大きくなるとともに、床面の傾斜が緩やかになる窯が構築されます。そして、焼成室の床面が燃焼室部分より高い位置から始まる形態に変化しています。

最後は、大膳第2号窯ですが、これは渥美窯・常滑窯を特徴づける分炎柱の構造がなくなり、高さ約1mの壁（障壁）を設けるだけの窯になります。E地区の平岩第2号窯・竜ヶ原第6号窯もこのタイプの窯です。常滑窯では分炎柱のない窯はほとんど見られませんが、中世湖西窯や渥美窯ではこの分炎柱のない窯が多数存在します。時期でいうと、おそらく渥美窯編年2 b～3 a期には分炎柱をなくするというコンセプトの窯が出てきて（E地区の竜ヶ原第4・5号窯）、3 a期には、分炎柱のない障壁構造の窯が主体となります。この移行期には、B：梅田川西地区に所在する姫田第1号窯のように、分炎柱があるのに障壁を持っている、極楽第2号窯と大膳第2号窯の中間的様相を持つ窯が構築されます。たぶんこれが、窯構造が分炎柱から障壁に移る時期の窯だと思います。3期の障壁構造を持つ窯は、中世湖西窯のいくつかの窯跡では、10数基が並列する形で検出されています。

窯構造については、今まで述べてきたようなことが確認されています。

6. 渥美窯の編年

次に、『愛知県史』を編さんする段階で初めて発表した「渥美窯の編年」について、少しお話ししたいと思います。

「渥美窯製品編年表」（図4～6）は、山茶碗類と壺・甕類の編年表です。この編年表は、『愛知

『県史』の編年表を少し手直したもので、未完成の部分がたくさんあります。今後の議論でいろいろなことを教えていただきながら、より精密なものにしていきたいと思っています。

渥美窯でも常滑窯でもそうですが、編年の基本となるのは、山茶碗、小皿の編年です。そして、山茶碗・小皿との併焼関係を明らかにしていくという方法で、壺・甕類などの編年を進めてまいりました。

まず、渥美窯の生産段階は、輪花碗・山茶碗と小碗・小皿との組み合わせにより、大きく3つの時期に分けることができます。1期は輪花碗と小碗の組み合わせの時期です。小碗の形態変化により、2つの時期（1 a期・1 b期）に分けられます。12世紀の前・中葉を想定しています。2期は、前半（2 a期）が輪花碗と小皿の組み合わせを指標とします。後半（2 b期）は、山茶碗と小皿の組み合わせになります。12世紀後葉から13世紀初頭にあたります。常滑窯などでは、小碗と小皿を併焼する窯がみられ、小碗から小皿へ移行する時期のものとして認定されていますが、渥美窯では、確実に小碗と小皿が同一の窯で同時焼成された例は、今のところ見つかっていません。3期は扁平化した山茶碗と小皿の組み合わせを指標としています。高台のないタイプの碗も出現します。3つの時期（3 a・3 b・3 c期）に細分されます。13世紀代に相当します。

以上が渥美窯編年の基本になります。

(1) 山茶碗の編年

渥美窯では、山茶碗はすべて「輪花碗」として始まります。図4-2、3は、坪沢第5号窯出土の小碗と笹尾第15号窯出土の輪花碗です。笹尾第15号窯の製品は、これまでの発掘調査で出土した1 a期の製品の中で、私が最も古い様相を持つと考えているものです。口径18cm、器高6～6.5cmほどの大型の輪花碗で、かなり定型化がみられ、ほとんどのものに灰釉の漬け掛けが施されます。愛知学院大学の藤澤良祐先生の山茶碗編年では、尾張型山茶碗の第4型式に相当すると思いますが、第3型式に遡り得る要素もたくさん

持っており、12世紀の第2四半期初頭の時期を考えています。同じ第4型式期に属する輪花碗類が中世湖西窯の山口第17地点1・2号窯、A地区の橋良東郷窯、C地区の富山窯・神ノ釜窯、D地区の坪沢窯・黒川窯、E地区の大アラコ窯などから出土し、定型化した大型の灰釉漬け掛け輪花碗として各地区で一斉に出現するという状況を示しています。しかし、初めから定型化した製品を、各地で一斉に生産したとは考えられません。必ず前段階の尾張の第3型式期に相当する窯跡が存在したはずで、湖西窯は古代の須恵器生産にはじまり、灰釉陶器の生産も行っています。その灰釉陶器生産の末期の窯の製品に伴うかたちで、口径16cmほどのやや小型の輪花碗や小碗が確認されるようになってきました。その中世湖西窯の輪花碗と同じような形態を持つ輪花碗が大アラコ第4号窯から出土しています(1)。大アラコ第4号窯は燃焼室を調査しただけで埋め戻された窯です。出土した輪花碗や山茶碗の形態にはばらつきがあるとともに、灰釉陶器を模したものがみられたり、新しい時期のものも含まれていたり、第一級の資料とはいえませんが、1は、12世紀の第1四半期に遡る可能性を持った輪花碗として編年表に入れることにしました。この輪花碗につきまちは、先月、湖西市で山茶碗の検討会を行った際、愛知学院大学の藤澤良祐先生から「1 b期の新しい時期のものではないか」という指摘がありましたが、高台のつくりで退化現象が見られないことや、器高が高く、口径との比率が1 b期のものより高い割合を示すことなどから、今回も1 a期前半のものとして提示することにしました。また、ご意見を頂戴したいと思います。

1 b期から3 c期にかけての変遷は、図4に示した通りですが、3 c期の終末の時期をいつに設定するのか、まだ、はっきりしません。渥美窯では、一応13世紀の末をあてていますが、3期になって生産体制を拡大する中世湖西窯では、14世紀代を想定しているようです。

(2) 壺・甕の編年

次に、壺・甕の編年ですが、甕については、『愛

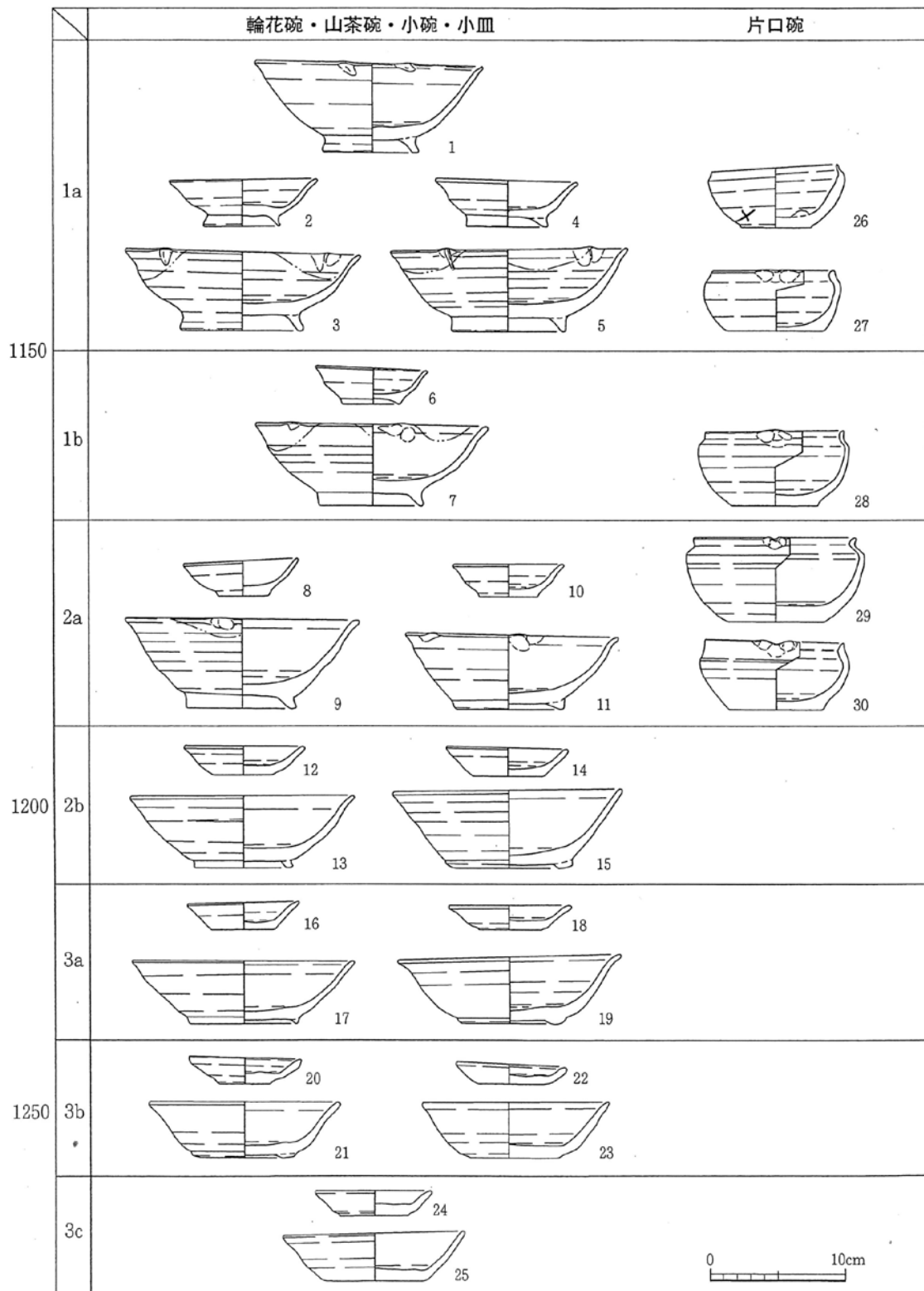


图4 渥美窯製品編年表

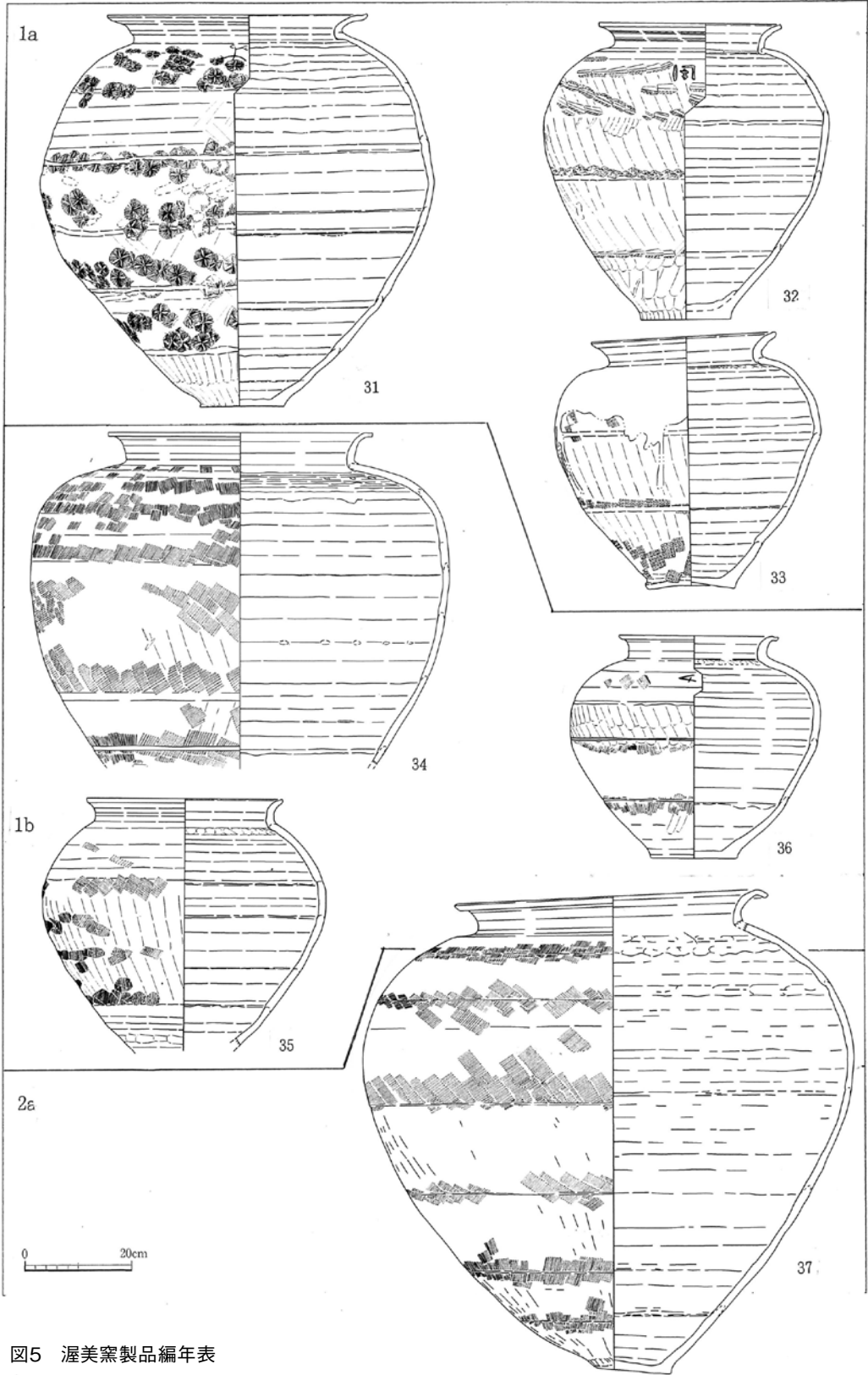
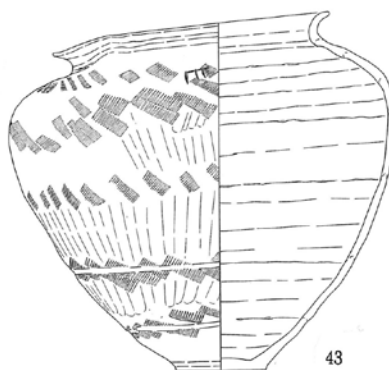
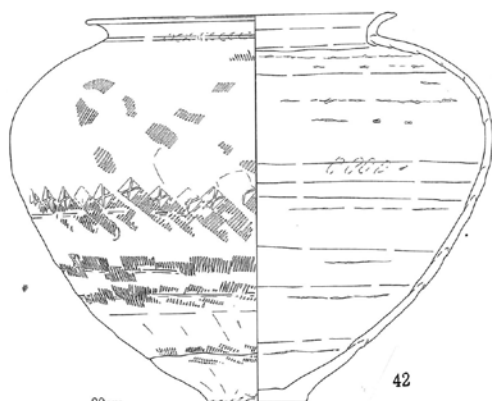
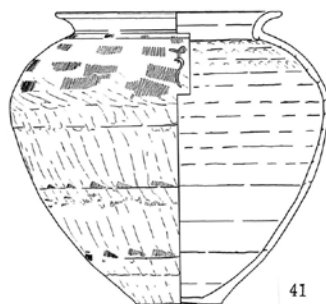
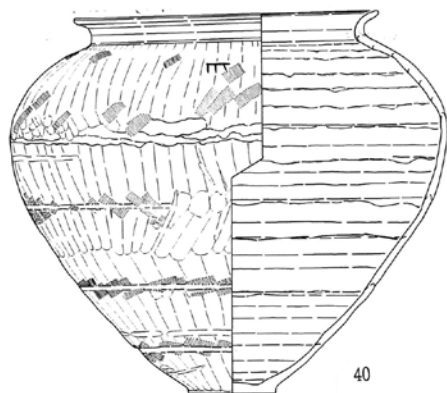
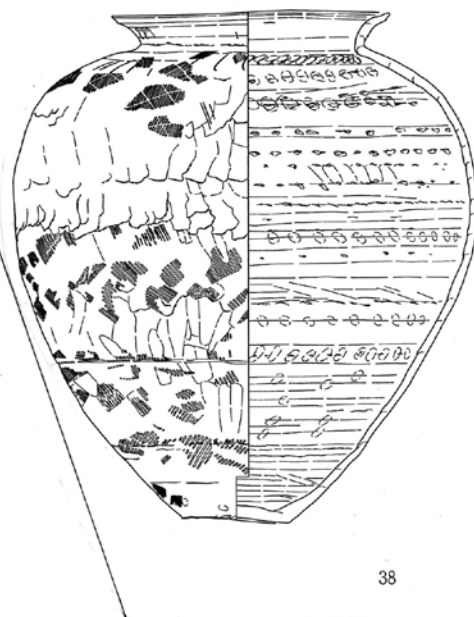
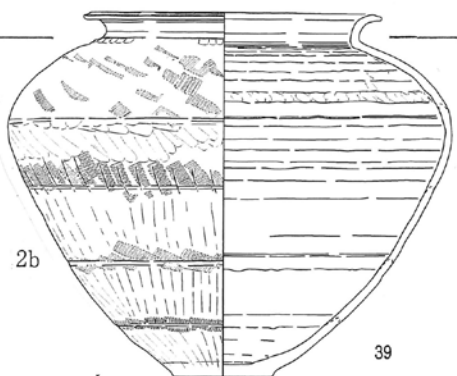


図5 渥美窯製品編年表

2a



0 20cm

知県史』の段階では、2 a期の良好な資料がまだはっきりしていませんでした。今回のシンポジウムに間に合う資料が出土したので、それを元に県史に発表した編年図を変更し、提示することになりました。(図5)

図5-31は大アラコ第2号窯、32は笹尾第15号窯、33は坪沢第4号窯出土の甕で、1 a期(12世紀前半)のもので、法量的に「大」「中」「小」の3つの大きさがあります。1 a期の甕は、倒卵形の体部に口頸部をそのまま垂直に載せています。体部内面をものすごくていねいに仕上げるのが特徴です。ヘラ描き記号文を多用し、押印は器面全面にランダムに施されます。押印原体が多種多様で、装飾的な文様が多く、32のように接合部ごとに違う原体を使用している例もみられます。

34は岩手県平泉の柳之御所跡、35は惣作第11号窯、36は和歌山県新宮市如法堂経塚出土の1 b期(12世紀中葉)の甕です。1 b期の甕は、1 a期の特徴をほぼ踏襲しています。

今まで2 a期の甕の実態はよくわからなかったのですが、先ほどから述べてきたように、最近の豊川用水路工事に伴い、弥栄1号窯や大草平松5号窯から、2 a期の輪花碗を伴う甕類が多数出土しました。38は、弥栄1号窯出土の大型の甕です。倒卵形の体部に口頸部をそのまま載せているのは、1期の製作技法を踏襲しています。体部内面の調整はやや粗雑になり、接合部未調整の部分もみられます。ヘラ描き記号文は一部残りますが、ないものも増えてきます。押印は、接合部に沿って帯状に施される(帯状連続施文)ようになります。押印の文様は、縦線文が主体となりますがその他の文様もみられます。2 a期でも古い時期に比定できる輪花碗が伴う大草平松5号窯からは、岩手県平泉遺跡群の柳之御所跡から出土した37とほぼ同じ製作技法で、器高が1 mに近い法量を持つ超大型の甕が出土しています。その結果、県史編年では1 b期とした37を、1 b期末から2 a期初頭に位置づけるのが妥当であると判断しました。また、39は茨城県門毛経塚から出土した甕で、県史編年では2 a期のものとして位置づけましたが、2 b期に近い様相を持っているため、

2 a期末から2 b期初頭におくことにしました。

2 b期の甕(40~43)は、体部は扁平球形で、口頸部は肩部を巻き込むように付けられます。体部内面の調整は粗雑です。接合痕は、そのまま残されます。押印文は縦線文系に集約され、帯状連続施文や烈点状施文(43)が主体となり、省略されることもあります。2 a期までの甕の製作技法とは大きく異なり、2 b期に壺・甕焼成窯が出現することもあり、この時期に甕の製作技法や生産体制における一つの画期があったと思われる。41は、鎌倉市の永福寺経塚から出土した甕です。2 b期の甕の中では、最も古い様相を持つものです。永福寺が1189年に建立を始めるということで、経塚を築いた時期も建立以前かほぼ同時期に比定できると思います。甕の蓋として用いられた渥美窯産の片口鉢(図6)も、鴨森7号窯出土品と同時期に位置づけることができます。また、この2 b期の甕類が1189年に焼失する平泉遺跡群から極少量しか出土せず、鎌倉市の鎌倉遺跡群からは数多く出土することも一つの目安になります。そして、東大寺瓦についても議論はあると思いますが、平成に入ってから、鐘楼だけでなく大仏殿の回廊跡などからも伊良湖東大寺瓦窯産の軒平瓦や軒丸瓦などが出土し、12世紀代

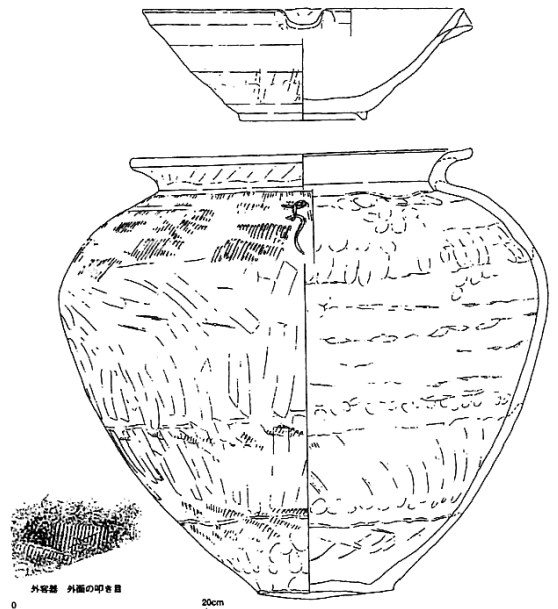


図6 永福寺経塚出土 渥美窯・鉢

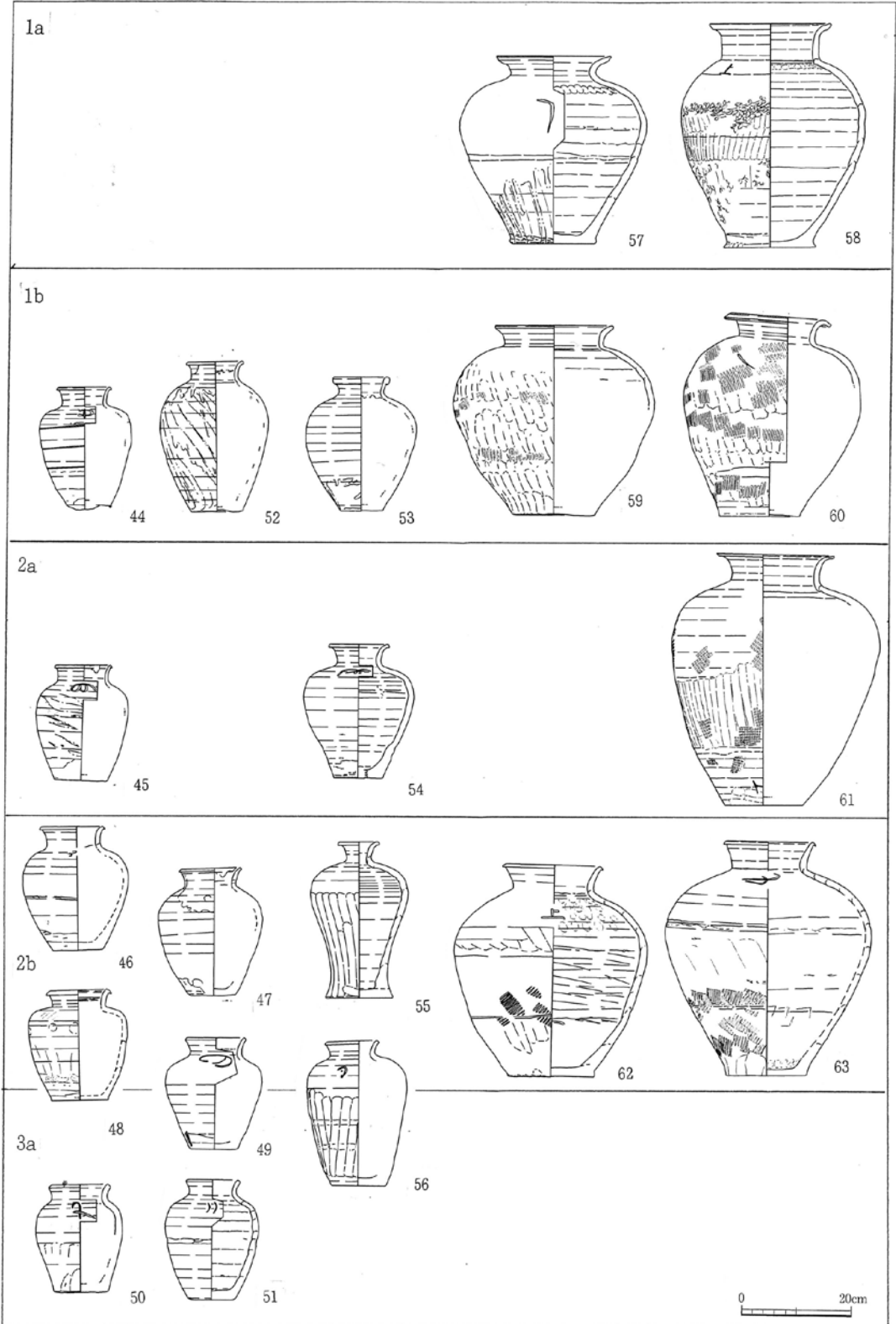


图7 渥美窯製品編年表

に製作年代が引き下げられる可能性がでてきたことなども一つの要素になりえます。従って、これらを根拠として、この甕の製作技法の画期は12世紀末に位置づけられるとともに、この2b期を1190年代から13世紀初頭に置くことができると考え、これを編年表の柱としました。

壺類につきましては、図7をご覧ください。右側の広口壺については、1a期が大アラコ第6号窯(58)・坪沢第5号窯(57)、1b期が大沢下第2号窯(59、60)、2a期が皿焼窯(61)、2b期が坪沢第10号窯(63)・鳴森1号窯(62)の出土品で、ほぼその変遷を辿ることができます。しかし、左側の小型壺や瓶子に関しては、46が坪沢第10号窯、47が鳴森3号窯、48が坪沢第1号窯出土品で、2b期のものは多く出土していますが、その他は消費地遺跡からの出土品で、変遷を明確に辿ることはできません。また、口頸部と肩部の境が明瞭でなくなる50や51などの小型壺は、器壁も厚く、体部には粗雑な縦方向ヘラ削りを多用するなど、退化傾向を示す一群です。これらの小型壺や瓶子などは、窯跡からの発見例がなく、時期をどこまで下げてよいのか、今のところわかっていません。このように、小型壺についての編年はあやしい部分をたくさん残しています。

以上、『愛知県史』に載せた編年表を少し手直しして提示しましたが、まだまだ考え直すことはたくさんあると思います。本日のシンポジウムでも、是非この2b期理論を掘り下げていただいて、少しでも実りのある編年表にしたいと思っています。

その他の器種の編年については、『愛知県史』の編年表をご覧ください。

7. 渥美窯の生産形態と渥美窯製品の流通

渥美窯では、A：柳生川地区が橋良御厨、B：梅田川西地区の西ノ川支群が野依御厨、老津支群が大津神戸、杉山支群が杉山御厨、C：汐川南地区の蜷川支群が上ヶ谷御厨と院内御厨、南神戸支群が浜田御厨、大草支群が大草御厨、D：汐川北地区の浦支群が吉胡御厨、清谷川北支群が田原御厨、清谷川南支群が勢谷御厨、加治支群が加治御厨(鍛治御厨)、黒川支群が新家御厨、E：芦ヶ

池南地区が国衙領、F：伊良湖地区が伊良湖御厨との関連が指摘され、それぞれの生産形態で操業していたと思われます。しかし、山茶碗類を主として生産する工人集団と壺・甕類を主体に生産する工人集団が別々に存在して共同で作業をしていたのか、それとも山茶碗類と壺・甕類を同じ工人集団が製作していたのかという基本的な問題を含め、生産形態については、ほとんどわかっておらず、これから解明していかなければならない課題が山積しています。

渥美窯製品の流通に関しては、渥美窯製品と中世湖西窯製品は、同じ天伯原台地の粘土を利用しているため、製品としてはほとんど区別することができず、消費地遺跡では、両者が渥美・湖西窯製品、もしくは、ひっくるめて渥美窯製品として扱われているのが現状です。これら両者の製品のうち、大型の壺・甕類が北は東北地方から南は九州地方に至る広域流通品であるのに対して、山茶碗類は東海地方を中心とする狭域流通品となっています。広域流通品である壺・甕類では、1a期から2a期にかけてのものが平泉遺跡群を中心とする東北地方や三重県・和歌山県・大阪府などの近畿地方を主な分布域にしているのに対して、2b期のものは鎌倉遺跡群を中心とする関東地方や東海地方を主な分布域にしています。また、全面灰釉小型壺や灰釉刻画文壺類などの優品は、平泉遺跡群を中心とした東北地方に多量にもたらされ、初期の渥美窯製品については平泉遺跡群を抜きに語れないという状況を示しています。しかし、流通に関しても、積出港や流通経路の問題など解明しなくてはならない課題が山積しています。

以上、渥美窯の概要について述べてまいりましたが、まだ、総合的な研究は緒に就いたばかりで、「渥美窯が、いつ始まりいつ終わるのか」という根本的な問題も含めて、これから解明していかなければならないことばかりです。本日のシンポジウムで問題点をどんどん指摘していただいて、少しでも、渥美窯の研究を前進していけたらと考えています。

つたない発表でしたが、ご清聴ありがとうございました。